第５９回神奈川建築コンクール　一般建築物部門　審査総評

審査委員　大原　一興

今年度の一般建築物部門への応募は４２件であった。

まず、選考の経緯について記しておくと、書類審査による一次選考では、あらかじめ応募作品の資格を確認し、各作品に対して各審査委員が評価点をつけ、その合計点の上位の作品から検討していき、合議の上、現地審査の対象となる建築作品を１５件に絞り込んだ。現地審査は、８月下旬、４日間にわたっておこなわれた。

現地視察後の第２次審査会では、現地審査での印象や評価について活発に意見交換された後、最終的な選考は投票により、各人の評価点数を合計した数値を参考にして授賞作を選んだ。この結果、最優秀賞１件、優秀賞９件、そしてアピール賞１件となった。現地審査の対象となった建築はいずれも見応えのある優れた作品であったことを付記しておく。

以降は、選ばれた作品全体の印象と、各賞の該当作品の紹介をしたい。

まず、全体の印象だが、昨年に続いて、存在感のある力強い建築が応募には目立った。周辺環境に依存するよりは自立性・完結性の高い建築物が授賞作としても多く、もちろん単一機能の建築はその存在感を存分に発揮しているものであった。一方、中でもいくつかの建築は、要求される空間の複合化への解答として、アセンブリングの巧みな造形が印象的であった。建築で産み出される空間の特徴としては、概してそこでの活動としての交流が重視され、集まる場としてのゆたかさを追求するものが多かったように思う。

最優秀賞となった「MUFG グローバルラーニングセンター」は、宿泊棟の外壁で中庭を囲みこむ独自の空間構成が見事で、表情豊かな空間要素が内側に詰まっており、そこに織りなす多様な視線が適度な距離を保ちながら交流をもたらし、外観からは想像が難しい「知層」の別世界が展開している。その空間を支える素材の選択やディテールも見事であった。

つづいて優秀賞の「横浜商科大学高等学校実習棟」は、構内の樹木や眺望など周辺環境との応答が優れた建築としては今回の中では秀逸な建築である。デザイン力の確かさに加え、ＲＣとの絶妙なバランスを保った木質材料としての燃エンウッドの使用法に可能性を広げたものと言える。

「湘南キリスト教会」は、小ぶりながら神聖な空間へと空間構成をいざなっていくデザインは魅力的で、周辺環境との取り合いもひそかに配慮されていることも好感度を高めている。何より施工技術の確かさにより建築空間としての完成度が高い。

「わかたけの杜」は、テラスハウス型のサービス付き高齢者向け住宅のひとつの先導的なモデルとなる建築であろう。確かな運営理念に支えられ、住居群としての空間構成も適度なボリュウムが保たれ、さらに建築内の要素としての設備などにもきめ細かい配慮が見られ、デザインの密度の高さが感じられる。

「港北幼稚園」は、子どもの活動の場としての機能を存分に発揮し、その手堅い空間構成から生まれる空間の安定感が、完成度の高さを感じさせている。みんなの広い庭を為す空間は醸成された郊外住宅地の風景を形作っている。

「COPEN LOCAL BASE KAMAKURA」は、町中の便利な要所に立つ建築物だが、広場のような空間の質を持つ建築空間となっており、置かれた自動車とともに人が集まり自然と交流を産み出す、公共空間と私的な商業空間との中間となる魅力的で独特な空間を形成している。

「ＩＨＩグループ人材開発交流センター」は、高台からの眺望の良い場を特定し、開かれた交流空間として魅力的な場を形成することに成功しており、研修のために訪れる人たちのための非日常空間を生み出している。

「神奈川工科大学新体育館」は、空間ボリュームの異なるいくつかの箱を積み上げたその独特の構成が、

決してばらばらにならず絶妙な一体感を呈していることに感銘を受ける。パターンのデザインから構造まで、全体を統合する力が高度なデザインを成立させている。

「アンリツグローバル本社棟」は、配置の軸線にあたって大山をよりどころに構え、眺望や環境配慮のための窓のディテール、効率とアメニティのバランスなど、大から小までの空間構成要素をすべてのレベルで密度高く保って設計をなしとげていることが伝わってくる建築である。

「専修大学 国際交流会館」は、ミニマムの居住空間を使い勝手良く、かつ多文化に配慮できるようなユニバーサル性能を持たせ、また住宅地の中に溶け込ませる配慮を丁寧に行っている。とくに内部空間は外部から予測しにくい豊かで洗練された居住空間を実現している。

今回のアピール賞として環境１件を授賞することとなった。

「大成建設技術センターZEB 実証棟」では、ゼロエネルギー建築のための技術的なショールームさながらその技術の表現のための実験的建築物として他に類を見ない特筆に値する建築である。